

〔桃山・江戸の絵画展によせて〕

伝尾形光琳筆「松図」(扇面貼交手筈)について

「扇面貼交手筈」は桐箱と、その中に落とし込んだ中籠に、八枚の扇面画と四枚の団扇画を貼り交ぜた作品です。このうち、三枚の扇面画に尾形光琳の落款と印章があります。扇面画、団扇画には、骨を挿した跡や折り畳まれた跡が残り、当初は、団扇、扇として制作され、しばらく鑑賞された後に、手筈に貼ったことがわかります。手筈には豪華に金箔を張り詰めています、実用に耐えるほど堅牢ではありません。これらの扇面画、団扇画を貼るために特別に仕立てられています。

「扇面貼交手筈」が主人から客人へ披露される場合、まず、棚などに飾られ、やや離れて全体の姿を客人に見せたと思われます。その後、客人の所望に応じて、主人が客人の前に持ち出します。その際、客人は「扇面貼交手筈」の周囲に視線を巡らしながら、一面づつ見えます。手筈の蓋を開ければ、中の扇面は見られません。中籠の表面に貼られた扇面画、「富嶽図」(図1)は、必ず、蓋の表面の「菊図」を描く二枚の団扇画と、裏面の二枚の団扇画、「八橋図」、「雪枯芦図」の後に現われます。この蓋を開けると、朝日のように差し込む光によって、雄大な富士の姿が徐々に

姿を現わす趣向です。夏の「八橋図」、冬の「雪枯芦図」に続く「富嶽図」は、山頂に雪を残し、霞が棚引く春風駘蕩たる春の情景です。この扇面画には、「法橋光琳」と落款が記され、ようやく「扇面貼交手筈」と光琳との関係が明らかにされます。群青、緑青で鮮やかに彩られた「富嶽図」とは対照的に、中籠の裏面の「雲竜図」は金泥を交えた水墨画です。「富嶽図」の登場から「雲竜図」への展開は、画題においても、表現においても、まるで舞台が暗転したように劇的な印象を与えます。この中籠を外し、深い手筈の内底を覗くと、金泥で描かれた「竹図」(図2)が現われます。「竹図」の柔かい金泥は、手筈の内側に貼られた金箔の強い輝きと階調をなし、手筈の内側を広く感じさせます。「扇面貼交手筈」には、もう一枚、金泥で描く「松葉図」があり、外側の底に貼られています。この二枚の扇面画には、ともに落款と印章がありません。金泥、銀泥で描く絵画には、俵屋宗達作品と伝えられる先例があります。これらのほとんどが書の料紙装飾です。「竹図」においても、それ自体で独立した絵画作品ではなかったのかもしれませんが。例えば、「富嶽図」、「雲竜図」のような扇面画の裏面として制作された

とすれば、当初から落款、印章がなかった可能性があります。

本来、「竹図」は、「富嶽図」、「雲竜図」と同様に、縦が約18cm、上弦が約50cmの10本骨の扇面画でした。画面の中央を貫く二本の竹が目につきますが、このうち、右の竹は葉を付けています。濃い金泥で描かれた葉は幹に比べるとかなり大きく強調されています。「竹図」の金泥には思い切って濃淡の変化を付けています。画面をよく見ると、この二本の他に、極めて淡い金泥で画面の左と右に竹を描いていることがわかります。右の竹は葉を付け、幹の下方では右から伸びてきた別の竹の葉が重なっています。やや細い左の竹は枝を上方に伸ばし、隣の竹に添うように配されています。「竹図」では、竹を二本ずつ左右に大きく振り分け、右寄りに重心を置きながら、幹の太さや間隔を調整して全体の均衡が図られています。

「竹図」に最も近い作風を示す光琳作品は、乾山の陶器に光琳が絵付した「鏤絵竹図角皿」(出光美術館蔵、図3)です。陶器の絵付は経年による変化が少なく、絵画作品とも比較できます。乾山の賛と落款を竹の幹に代えれば、竹の幹や葉の表現だけでなく、画

面構成においても「竹図」との共通点が見出せます。この作品は、乾山の型摺印、画面の枠取線、立ち上がる側面の文様から、藤田美術館に所蔵される十枚組の角皿に近い作品と考えられています。この十枚の中にも、竹を描いた角皿が二枚あり、やはり同じような表現で描かれています。光琳の代表的な絵画作品に、二曲の金地屏風に水墨で竹と梅を描いた「松梅図屏風」(東京国立博物館、図4)があります。意匠的に表現されていますが、画面には静かな韻律が漂い、新鮮な潤いまで感じさせます。「竹図」、「鏤絵竹図角皿」、「松梅図屏風」の三作品は、画面の形も材質も異なります。ただし、ともに顔料が滲まない素材に描き、下地が透ける効果が絵画表現に活かされています。「竹図」を光琳作品とするには、まだ検討を要しますが、「鏤絵竹図角皿」や「松梅図屏風」に光琳様式の特徴を認めるならば、少なくとも、光琳様式に連なる作品と言えるでしょう。(中部義隆)

図3は特別展「乾山のやきもの」図録(五島美術館 昭和62年)、図4は「乾山の芸術と光琳」展図録(NHKポロモーション 平成19年)より複写させていただきました。



図1



図2



図3



図4

季刊 美のたより No.166

平成21年4月5日

発行 大和文華館